

## I. 以下の文章を読んで、次の問1～問6に答えなさい。

制度上は平等な権利を与えられていても、異なる二者の間に権力関係が生まれ、一方が他方に対して優位に立つということがある。このような権力関係は男女の間の関係にも見られ、それは法律を中心とする公式の制度とは別に、社会の中に目には見えないルールが存在することに由来する。「男性は男らしく、女性は女らしくなければならない」というそのルールを、一般にジェンダー規範と呼ぶ。ジェンダー規範は社会規範の一種であり、人間を男性と女性の二種類に分けた上で、それぞれの人に自らの性別に合わせて一定の仕方で振る舞うように命じる。ジェンダー規範は常に対になっており、男性に何らかの行動を求める規範は、同時に女性には別の行動を求める。ある行動が法律では許されていても、ジェンダー規範によっては許されていない場合、人はその行動を選択しづらい。服装は男女に関わりなく自由であるはずだが、男性がスカートをはいたり女性が坊主刈りにしたりすることは滅多にない。悲しい時は涙を見せても良いはずだが、男性が人前で泣くことは珍しい。

こうしたジェンダー規範はどこから来るのか。一般に本質主義と呼ばれる立場に従えば、男らしさや女らしさは、男性と女性の (1) (2) な違いを反映して、自然に生じてくるとされる。身長、筋肉量、脳の構造、男性ホルモンのひとつであるテストステロンの値など、男性と女性は遺伝的に違いがあるのだから、両者に向いている生き方も異なると考えるのである。

しかし、この考え方には重大な欠点がある。確かに、平均的に見れば男性と女性には様々な違いがあるかもしれないが、個々の男性の間の違いと個々の女性の間の違いは、男女の平均値の差に比べてあまりにも大きい。それぞれに個性あふれる人々の行動が、ジェンダー規範の命じるような形で、男性と女性で明確に二つに分かれるとは考えにくい。だとすれば、ジェンダー規範は決して人間の (1) (2) な本性を踏まえたものではなく、何らかの形で (3) (4) に作られたものだろう。こうした考え方を、(a)構築主義と呼ぶ。人がジェンダー規範を身につける過程には様々な側面があり、家庭や学校などで親や友人と交わす会話だけでなく、メディアとの接触などを通じて、人は男らしい、女らしい振る舞いを学んでいく。

ジェンダー規範は、男性と女性に異なる (3) (4) な役割を与える。こうした社会規範が作用するメカニズムを考える上では、法的なルールとの対比が有効だろう。誰かが法律に違反した場合、警察に逮捕されたり損害賠償を求められたりすることで、何らかの物理的・経済的な制裁が加えられる。そうした制裁を避けたいと考えるからこそ、人々は法的なルールに従う。社会規範も、それに違反した人が制裁を受ける点では法的なルールと似ている。だが、社会規範と法律とでは、違反によって生じる帰結が大きく異なる。法律の場合、違反に対する制裁は国家権力に裏付けられている。( A ), 社会規範の場合には国家権力の裏付けは必要ない。社会規範に違反している人を目撃した人は、その違反者を避け、冷たい態度を取るといった形で、自発的に制裁を加える。

そうした個人による社会規範の執行には、感情の働きが伴う。例えば、女性に対して男性が抱く女性蔑視の感情や、女性が自分自身に抱く自己嫌悪の感情を指して、ミソジニーという言葉が使われることがあるが、ミソジニーに直面しやすいのは、女性の中でもとりわけ「女らしく」生きることを (5) (6) する女性である。逆に男性も、「男らしく」振る舞うことができない場合には、「( あ )」などと言われ、生きづらさを感じることになる。

今日の日本では、「男は仕事、女は家庭」といった規範を正面から肯定する人は減ってきている。

(7) (8) な男女差別を行えば、たちまちマスメディアなどの批判の対象となるだろう。( B ), 企業や官庁の人事採用担当者は、自らの組織に必要な資質を持つ人を採用していると述べるだろうし、政治家の役職を決める政党の幹部は、性別に関係なく (9) (10) で人材を起用していると述べるに違いない。こうした事情もあってか、男性の多くは自分が (11) (12) な地位を享受している感覚を持っていない。

( C ), やはり世の中は男性優位である。家庭の外で政治活動や経済活動に携わる時、人は企業、官庁、政党など、何らかの組織に所属することが多い。例えば、経営者には男性が多く、秘書には女性が多い。パイロットには男性が多く、キャビンアテンダントには女性が多い。医師には男性が多く、看護師には女性が多い。どの組み合わせも、男性を女性が (13) (14) する形になっている。この現象を説明する上では、組織の規範が大きな役割を果たす。その規範は「この組織の構成員は X でなければならない」という形で定式化される。通常、この X の内容は (15) (16) によって定義されるわけではない。そこには「冷静沈着」「質実剛健」「競争的」「積極的」「(17) (18)」といった単語が入る。市場競争で勝ち抜いたり権力を掌握したりする上ではこれらの資質が必要である、という考え方は、一見するともっともらしい。

だが、ここで X に含まれる資質は、多くの場合、「男らしい」と言われる性質と重なっている。たとえ組織規範が男性と女性を差別していなかったとしても、社会の中では「( ア ) は ( イ ) でなければならない、( ウ ) は Y でなければならない」というジェンダー規範が作用している以上、(7) (8) に男性を優遇しているわけではない組織規範も、「男らしさ」を優遇している可能性があるのだ。このような視点から見れば、資本主義という経済システムそのものが、激しい市場競争を伴うという意味で、「男らしさ」と結びついている。これまで多くの日本の会社員は、会社のために深夜まで働き、上司と夜の街に繰り出し、辞令に従って転勤し、部下を叱咤激励して売り上げ目標を達成することを求められてきた。そのような組織の規範は、社員が会社に献身する陰で、誰かが家庭において家事や育児を担っていることを前提にしている。それが女性よりも男性に有利な規範であることは、言うまでもない。

その結果、女性は「<sup>(b)</sup>ダブル・バインド」に直面する。ダブル・バインドとは、二つの矛盾する要求で板挟みになることを意味する。一方には、積極的で「男らしい」行動を求める ( エ ) があり、他方には優しく「女らしい」行動を求めるジェンダー規範がある。そこで女性が「男らしい」行動をとれば、「女らしくない」と言われてしまう。男性であれば「( い )」と評価される行為は、女性であれば「( う )」とみなされる。つまり、組織の構成員が直面する規範は、実際には二重構造になっているのだ。その基底には男性と女性に異なる振る舞いを命じるジェンダー規範があり、それを補う形で、組織の構成員に一定の振る舞いを命じる組織規範がある。この組織規範が表面上はジェンダー (19) (20) であるからこそ、それ自体は批判の対象になりにくい。組織の構成員も、自分は男女差別をしているつもりはなくても、無意識のバイアスの働きによって男性と女性に対して異なる基準を当てはめてしまう。こうして、男女を差別しないはずの組織において、大きな男女の不平等が生まれることになる。

このようなバイアスは政治制度とも無縁ではない。ジェンダー規範からの逸脱に対する制裁が繰り返されることは、女性が自発的に政治の世界から退場するという結果をもたらす。「女性は女性らしく、他人と表

立って競争するのではなく協調するべきだ」という規範を身につけた女性は、選挙活動に常に伴うような激しい競争を避けるようになるだろう。女性に競争を回避させるジェンダー規範がある限り、自由な競争に開かれた選挙制度は、必然的に男性に有利な仕組みになってしまうのである。

(前田健太郎『女性のいない民主主義』岩波新書、2019年、第1章を改変して作成した。)

問1. 本文中の空欄 (1) (2) ～ (19) (20) にあてはまる最も適切な語を次の選択肢から選び、その番号を解答用紙 A (マークシート) の解答欄 (1) ～ (20) にマークしなさい。なお、同じ選択肢は2回以上使いません。

- |        |        |         |         |         |         |
|--------|--------|---------|---------|---------|---------|
| 11 懐疑的 | 12 間接的 | 13 強制的  | 14 強調   | 15 協調的  | 16 拒否   |
| 17 肯定  | 18 指導  | 19 社会的  | 20 心理学的 | 21 生物学的 | 22 性別   |
| 23 妥協的 | 24 中立的 | 25 適材適所 | 26 特権的  | 27 脳科学的 | 28 不偏不党 |
| 29 法学的 | 30 法律  | 31 補佐   | 32 明示的  | 33 野心的  | 34 理屈   |

問2. 本文中の空欄 ( A ) ～ ( C ) にあてはまる最も適切な語句を次の選択肢から選び、その番号を解答用紙 A (マークシート) の解答欄にマークしなさい。ただし、( A ) (21), ( B ) (22), ( C ) (23) である。なお、同じ選択肢は2回以上使いません。

- 1 それに加えて    2 それに対して    3 それにもかかわらず    4 それゆえ

問3. 本文中の空欄 ( あ ) ～ ( う ) にあてはまる最も適切な語句を次の選択肢から選び、その番号を解答用紙 A (マークシート) の解答欄にマークしなさい。ただし、( あ ) (24), ( い ) (25), ( う ) (26) である。なお、同じ選択肢は2回以上使いません。

- 1 偉そうだ    2 情けない    3 包容力がある    4 リーダーシップがある

問4. 本文中の空欄 ( ア ) ～ ( エ ) にあてはまる最も適切な語を本文中からそれぞれ抜き出し、解答用紙 B の所定の欄に記入しなさい。

問5. 本文中の下線部 ( a ) の立場によれば、人が特定の社会規範を身につけるのはなぜか。本文の論旨から見て最も適切な理由を、「制裁」という語を用いて、解答用紙 B の所定の欄に20字以内で記入しなさい。

問6. 本文中の下線部 ( b ) について、なぜ女性だけが「ダブル・バインド」に直面するのか。その理由を説明するとき、次の空欄に入る最も適切な語句を考え、解答用紙 B の所定の欄に20字以内で記入しなさい。

男性の場合とは異なり、女性の場合は (                      ) から。

## II. 以下の文章を読んで、次の問1～問6に答えなさい。

「急成長」「爆発的な増加」など、何かが比較的短期間に大きく増える様子を表す言い回しがある。ではこのとき、どんな増加の様子を思い浮かべるだろうか。1つのパターンとして、一定期間に一定数ずつ増えるものがある。例えば、ある企業の2018年度の年間売上高が1億円だったとしよう。翌年度には1億5千万円の年間売上高を達成し、2020年度には2億円、2021年度には2億5千万円というように、(a)1年毎に5千万円ずつ増加したとする。同業種の他社、あるいは平均的な企業における推移と比べて、この企業の増加の程度が目立って大きければ「急成長」している企業だと評されるだろう。もしくは、(b)2018年度以前のこの企業では毎年同程度の年間売上高であり、その後上述の増加が起きていたならば、2018年度より後に「急成長」したと表現することもできる。さらに、他のパターンとして(c)指数関数的な増加がある。

指数関数的増加を説明するのによい例が、和算の1つである「ねずみ算」であり、次のような内容となっている。正月にオスとメス1対のネズミが現れて12匹の子供を生んだ（半数がオス、残り半数がメスだと仮定）。従って親も含めると全部で7対（オス7匹、メス7匹）、すなわち合計14匹のネズミになった。2月になると、親ネズミも子ネズミも1対につき性比が1:1の12匹の子供を生み、全部で 

(27)	(28)	(29)
------	------	------

 匹となった。このように、月に1度ずつ、各世代でネズミ1対につき毎月12匹ずつ（性比は1:1）生むとすると、その年の12月には全部で何匹のネズミがいることになるか（生まれた全てのネズミが生き続けていることを仮定）。答えは27,682,574,402匹である。

上述からわかるとおり、1ヵ月経つ毎に1対のネズミが14匹に増えるため、ネズミの数は毎月 

(30)	(31)
------	------

 倍となる。従って12月のネズミの数は、2に 

(30)	(31)
------	------

 を 

(32)	(33)
------	------

 回かけた数、すなわち27,682,574,402匹となる。式で表すと  $2 \times$ 

(30)	(31)
------	------

(32)	(33)
------	------

 と書くことができ、この時の 

(30)	(31)
------	------

 を底、

(32)	(33)
------	------

 を指数と呼び、指数が変数になっているものを指数関数と呼んでいる。ねずみ算からもわかるとおり、指数関数では変数が大きくなるにつれ、思いもかけないような急激な増加が観察される。このため、短い期間に激しく増えることの例えとして「指数関数的」という言葉が用いられる。

このような増加のパターンを正確に理解しておくことは重要である。なぜなら、増加の様子を把握することで私たちは未来の値を予測し、それによって自身の行動を決めたり、経営戦略を練ったりするからだ。最初に挙げた年間売上高の例の場合には、私たちは容易に妥当な予測を行うことができる。毎年5千万円ずつ増加するのであれば、10年後には 

(34)	(35)
------	------

 億円増えるだろうとすぐに計算できるし、直感的にも理解しやすい。ところが、指数関数的に増加する場合には、時間経過に伴って増加する値を過小に見積もってしまうことがある。その原因として、指数関数的増加の特性が考えられる。

未来を予測する際には、値が増加しつつある状況、つまり局所的な情報を基に判断する。ある品物Aが1,000円で販売されているとしよう。品物Aに対する需要に供給が追いつかず、毎週2%の値上がりが発生したとする。(d)週を変数xとし、販売価格をyとすると両者の関係は数式で表すことができる。最初1,000円だった品物Aは1週間後には2%値上がりするので、1,000円に 

(36)	(37)	(38)
------	------	------

 をかけた価格になる。翌週もさらに2%値上がりし、

(39)	(40)	(41)	(42)
------	------	------	------

 円（小数点以下四捨五入）で販売される。3週目には1,061円、4週目には1,082円、というように、大雑把に見て1週間経つ毎に約20円ずつ価格が上昇することがわかる。もっと時が経ったころの様子を見てみよう。この状況が長く続いていたとして、約7年後である365週目の販売価格は1,377,408円になっている。366週目の販売価格は 

(43)	(44)	(45)	(46)	(47)	(48)	(49)
------	------	------	------	------	------	------

 円（小数点以下四捨五入）になると計

算でき、1週間遅れて購入するだけで、

(50)	(51)	(52)	(53)	(54)
------	------	------	------	------

 円（小数点以下四捨五入）も高い金額を支払わなくてはならない。そして、367週目に購入する場合には前週より28,099円高くなり、368週目にはさらに28,661円多く支払うことになる。このように、365週目付近に着目すると毎週およそ2万8千円ずつ価格が上昇しているように見える。つまり、初期のころであっても7年後であっても、局所的には一定期間に一定数増加しているように見え、ずっとそのペースでの値上がりが続くと感じてしまうのだ。

(e)この勘違いによって、どのくらいの差が生じるのか計算してみよう。いま、Bさんは368週目の時点において、約1年後の420週目に品物Aを1個購入するつもりで必要な金額を準備しておかなくてはならないとする。そして、実際には週に2%値上がりする指数関数的な増加であるにもかかわらず、368週目以降は毎週2万8千円ずつ値上がりすると直感したとしよう。すると、必要な最低金額として（ア）円準備すれば良いと判断できる。ところが、実際の420週目の販売価格は4,093,286円となり、準備したお金が不足して購入できない、ということが起きてしまう。

こうした特性のため、指数関数的増加を実際に経験すると、思いがけない増加の度合いに驚き、慌てることがある。指数関数的増加には、急激な増加という特徴に加え、上述した特性があることを念頭に置くことで、それに合わせた準備を進めたり、経営戦略を立てたりすることができる。「こんなはずではなかった」と無策のまま翻弄されることはないだろう。

問1. 本文中の空欄 

(27)	(28)	(29)
------	------	------

 ～ 

(50)	(51)	(52)	(53)	(54)
------	------	------	------	------

 に入る適切な数字を、解答用紙A（マークシート）の解答欄 

(27)
------

 ～ 

(54)
------

 にマークしなさい。ただし、2つの連続した空欄（例えば 

(30)	(31)
------	------

）に1桁の数字が入る場合は十の位に0をマークしなさい。3つ以上の連続した空欄の場合も同様に対応すること。

問2. 本文中の空欄（ア）に入る最も近い数を次の選択肢から選び、その番号を解答用紙A（マークシート）の解答欄 

(55)
------

 にマークしなさい。

- |        |        |        |
|--------|--------|--------|
| 1 100万 | 2 300万 | 3 500万 |
| 4 1千万  | 5 3千万  | 6 5千万  |

問3. 本文中の下線部（a）～（c）を表すグラフの形状として最も適切なものを次の選択肢から選び、その番号を解答用紙A（マークシート）の解答欄 

(56)
------

 ～ 

(58)
------

 にマークしなさい。ただし、（a）

(56)
------

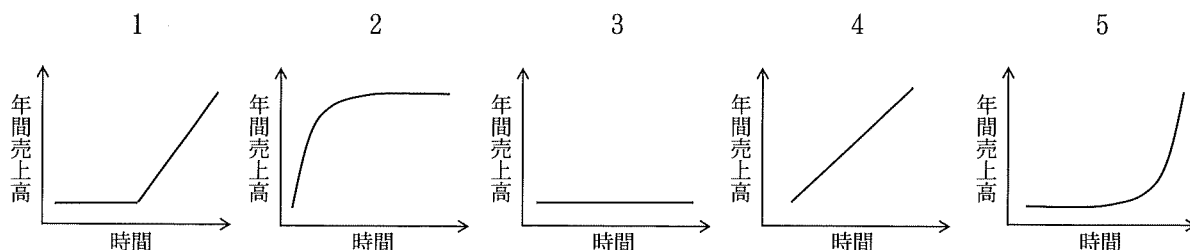
，（b）

(57)
------

，（c）

(58)
------

 である。なお、同じ選択肢は2回以上使いません。

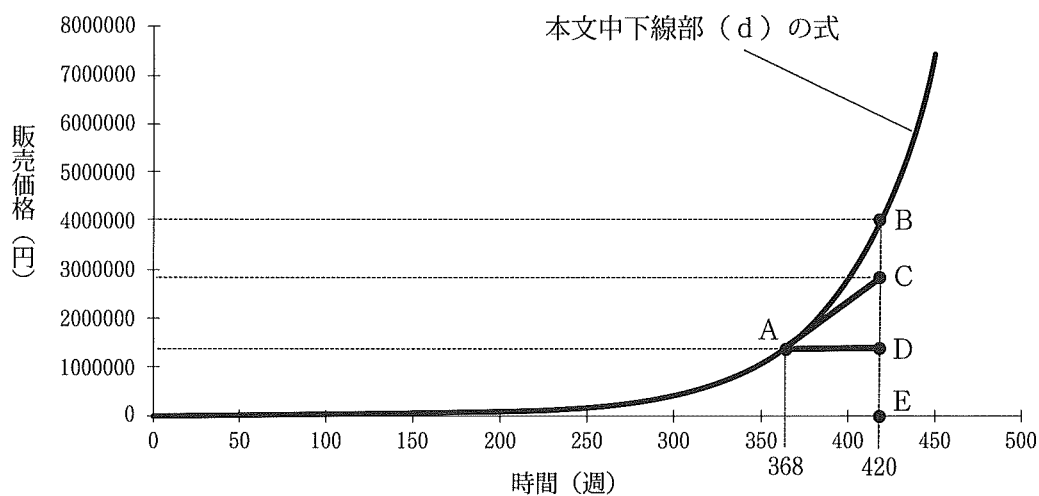


問 4. 本文中の下線部 (d) について、次の空欄に入る式を解答用紙 B の所定の欄に記入しなさい。

y =

問5. 本文中の下線部(e)について、以下のグラフを用いて説明するとき、次の空欄に入る最も適切な語句を考え、解答用紙Bの所定の欄に8字以内で記入しなさい。

この差は、( ) を求めたものである。



問6. 本文の論旨から見て、次の空欄に入る最も適切な語句を考え、解答用紙Bの所定の欄に30字以内で記入しなさい。

指数関数的な増加には、急激に増加するという特徴に加え、( )という特性があるため、人は予測を誤ってしまうことがある。